



これからの社会、太陽に向かっては、とても生きていけない  
そんな僕自身の思いも『肉体の市場』に込められていたんです



『**肉体の市場**』  
僕はいろんな所へ行ったりして、自分の引き出しを広げるといふか、材料を集めてたんです。その頃、毎晩のように六本木に行つて、いろんな若い連中と知り合つて一緒に呑んだり遊んだりしてました。その仲間の一人のフィアンセが、店のトイレで強姦されて、一週間後くらいに自殺したんですね。誰がやったかは今もってわからないですけど、それにヒントを得て、世の中には悪い奴がいる、これからはもつとそういうのが増えてくるだろうから、そういうものに対する警鐘として話を作つていったわけです。

それを近江敏郎先生に話して、大蔵貢社長に話がついて、「じゃあ金出してやるからお前のプロダクションでやれ」という話になって。裏面では、乱交、クスリ、セックスというのがあるわけですけど、それは表現出来ないわけです。

例えば男女が布団に入っている。それを俯瞰で撮つたんですけど、男の足が動いてると、「あれ、絡まってるじゃないか。カットして欲しい」と。それから、車の中で男がハンドルを握つていて、左手

こばやし さとる／映画監督

1930年長野県生まれ。59年『狂った欲望』で監督デビュー。62年、ピンク映画第一号と呼ばれる『肉体の市場』を発表。主な監督作は『黒幕』（66）、『不能者』（67）、『鏡の中の野心』（72）、『一本の毛』（86）、『どスケベ女社長 未亡人の性欲』（00）など。70年代には東活で変名を使い月3本を撮り上げていた。400本以上の作品を手掛け、遺作となった『川奈まり子 桜貝の甘い水』の撮影中に倒れ、2001年11月15日永眠。享年71歳。

# 小林悟

Interview

取材・文：林田義行

初出：PG No.91

再録

1962年の監督作『**肉体の市場**』。

それは猥雑容疑で摘発され、後にピンク映画第一号と呼ばれた――。

職人監督として最後まで映画の現場を愛し続け、400本以上の作品を残したパイオニア・小林悟監督の40年に渡るピンク映画人生、その初期衝動とは…。

がスツと女の下半身の方へ行くという場面。外から撮ってるんでその手は全く映ってないんですけど、「あれは切って欲しい」と。他にもリンチのシーンはもうホンの段階から三分の二位は切られました。結局そこは、裏切った女の子がロープで縛られていて、蠟燭の火がロープに燃え移ると短刀が心臓目掛けて振り下ろされる。それをどれだけ耐えられるかみたいなシーンに変えたんです。それも本当は全裸でやりたかったのをスリッパで着せて。そうしないと通らないわけです。それを釘に引っ掛けて破いたりとか、そんな変な理屈をつけて、必然性をつくるような形でやってました。本当はそんなことではエロティシズムは表せないでしょうけど。

## エロティシズムを描くこと

僕の描こうとするエロティシズムというのは、そんな力づくというのではなく、感情がフワッと大きくなってくるような表現の仕方が一番好きなんです。でも今はそれはやらせてくれないわけです。もっとハードに。営業的にその方がいいと



最初は三館で封切ったんです。神田アカデミーとか。「おい、神田行ってみる」って言われて、何かと思って行ってみると、ズラッと人が並んでるんですよ。聞いたら「映画観に来たんだって」。

何もセックスだけを取り上げたんじゃないって、社会的な背景の中で男女を描いたわけです。それでも『肉体の市場』は売れに売れて、網走あたりに行っても同じプリント代だったらしいですね。

僕が二本目を撮ってる頃に、本木庄二郎さんが「襖とかを变えるからスタジオオ貸してよ」なんて言って撮ってましたね。



いうんでは、僕は職人だからやりませんが、エロティシズムというのはまた違うと思うんです。

当時は何年もそういうふうには撮られませんでしたから、服を着せたまま何とかエロティシズムを出せないものかというのをいつも考えています。武智鉄二さんの白

当時は大蔵映画もスタジオオがありましたから。そうやって増えてきて、系統館が出来たのは一年くらい経ってからはじゃないですかね。大蔵映画と、亡くなられた鷲尾飛天丸さんが作られた日本シネマが最初くらいだと思います。その頃になって、ピンク、という名前がついたんです。とにかく本数が多かったですね。



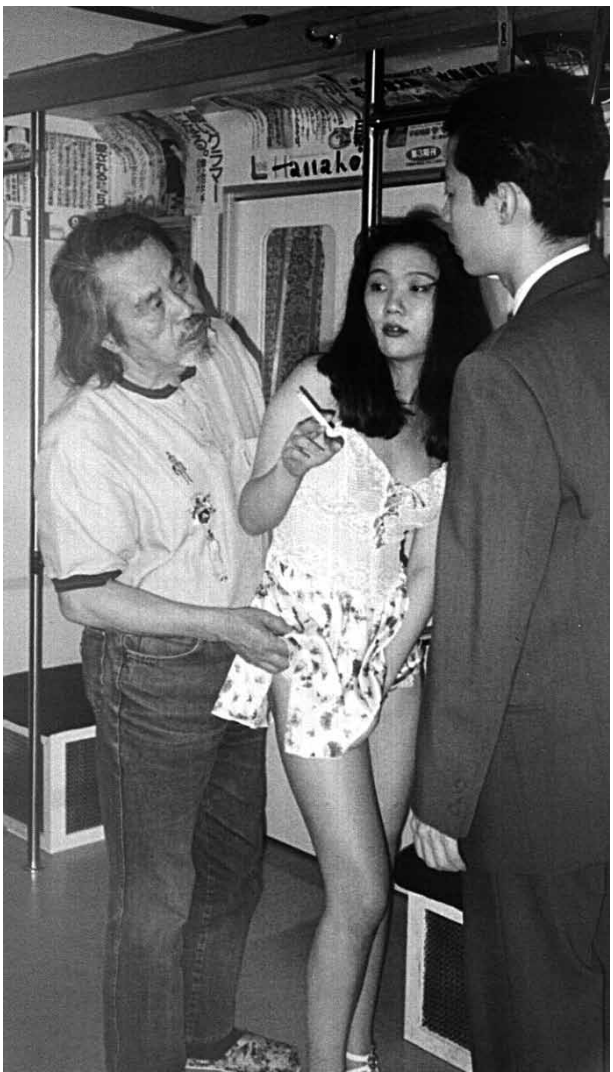
態で、銀座通りを交番の方へ走ったんですけど、振り返る人はほとんどいなかったです。ああ、人間なんてこんなものかなって思いましたね。

『肉体の市場』のラストシーンがこんな場面なんです。六本木から東京タワーが見えますよね。そこから朝日が登ってくるんです。それに背を向けて敵討ちをしたヒロインが歩いていく。その横を都電が走っていくという。それも胸を見せることも出来ないですから、襦袢にセロテープをくっつけて、乳首を見えないようにして。

人間の生きざまというか、太陽に背を向けてその子はこれからも生きていくんだらうという。これからの社会、太陽に向かってはとても生きていけない、それだけの勇氣はとてなかつた。そんな僕自身の思いもそこに込められていたんです。

## ピンク映画 第一号と呼ばれて

僕も何故そう呼ばれたのかはよく分からないんですけど（笑）。それまで邦画六社というのは全部系統館があつたじゃないですか。ピンク映画の場合はそれになかつたんです。『肉体の市場』は東京は



※場面写真は「沖縄怪談 逆吊り幽霊・支那怪談 死棺破り」より